

デジタル化成功事例・取組事例

株式会社 第一包装企画（業種：印刷・製版業）

URL : <https://www.daiichihoso.jp/>

企業概要		事業概要	企業理念
資本金	1,000万円	<ul style="list-style-type: none">フレキソ印刷包装デザイン・紙器包装デザイン樹脂版の製作・ゴム版の製作・包装設計サンプルケースの製作・抜き型の製作DECOPOP販売	お客様のあらゆる要望に真摯に向き合う。先取りした提案で、期待を超える価値を創り出す。
従業員数	26名		
代表者	宮下 満栄		



デジタル化を進めた背景・抱えていた課題

製造スケジュール表は、長年にわたり手書きで記入する運用が続いていた。

その結果、営業部からは「情報を項目ごとに整理・分類できず見づらい」「FAXで共有されるため、リアルタイムで状況を確認できない」といった不満が以前から上がっていた。

一方で、デジタル化が進まなかった背景には、いくつかの課題があった。

- ①スケジュール表の作成を高齢のベテラン社員が担っていたことで、従来の運用を変更しにくい状況にあったこと。
- ②作業効率の低さや記入ミスによる影響が具体的な数値として可視化されておらず、デジタル化の必要性が社内で十分に認識されていなかったこと。

導入したソリューション・工夫したポイント

【導入したソリューション】

- ・製造スケジュール表のデジタル化
- ・グループウェア導入による社内情報共有（現在テスト中）

【工夫したポイント】

製造スケジュールのデジタル化にあたっては、単なる紙の置き換えにとどまらず、スケジュール表としての見やすさを重視するとともに、誰でも直感的に入力できる操作性を意識した。

あわせて、作業効率の向上につながる機能を取り入れ、場所や時間にとらわれず、いつでもどこからでも閲覧・確認できる仕組みとした。

デジタル化成功事例・取組事例

導入の効果・成果

製造スケジュール表のデジタル化の効果

従来の手書きのスケジュール表



製造スケジュール表のデジタル化



FAX 送信

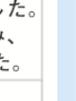
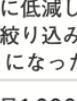
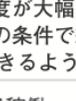
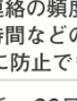
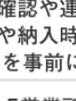
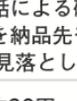
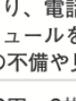
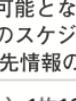
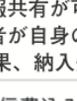
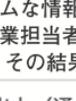
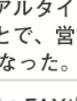
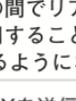
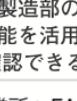
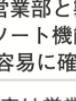
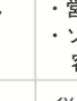
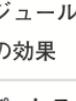
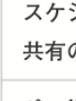


松本営業所
群馬営業所
新潟営業所
関東営業所
千葉営業所

プリント出力せずコスト削減

ソート機能で営業担当者ごとに並べ替えてきて見やすい!
※営業担当者はスケジュール表を操作できません

いつでもどこからでも閲覧が可能に!!



※今後の展開（課題）＝チャットなどの併用で、製作者の手を止めずにスケジュール調整をおこないたい

項目	内容
改善対象	製造スケジュール表のデジタル化
現状	手書きのスケジュール管理
改善後	Excelファイルによるデジタル化（単語入力機能、プルダウン機能、コピー＆ペーストの活用）
KGI(最終目標)	スケジュール表の入力作業時間50分 → 30分以内に短縮
KPI(進捗指標)	Excelファイルの作成・導入完了、作業時間が40分以内に短縮（導入1か月後）、作業時間が30分以内に短縮（導入6か月後）、1か月あたりのコスト削減額20,000円の達成
コスト削減効果	作業時間短縮：1日20分削減、1時間当たりコスト：3,000円、20日稼働で月間削減額：20,000円、 <u>年間削減額：240,000円</u>
導入時期	3月1日：テスト運用開始、5月1日：本運用開始（スケジュール表をモバイルでも見れることを可能に）
スケジュール共有の効果	・営業部と製造部の間でリアルタイムな情報共有が可能となり、電話による確認や連絡の頻度が大幅に低減した。 ・ソート機能を活用することで、営業担当者が自身のスケジュールを納品先や納入時間などの条件で絞り込み、容易に確認できるようになった。その結果、納入先情報の不備や見落としを事前に防止できるようになった。
ペーパーレス化	従来は営業所へFAXを送信：FAX出力（通信費込み）1枚10円～2枚20円 × 5営業所 × 20日稼働 = 月1,000円～2,000円、 <u>年間12,000円～24,000円のコスト削減</u>

これからデジタル化に取り組む企業へのメッセージ

業務改善を進めるうえで特に重要だと感じたのは、現場担当者も巻き込み、密なコミュニケーションを取りながら進めることだった。現場の視点を取り入れることで、多角的かつ実態に即した業務改善が可能となり、さらに他部署とも合意形成を図りながら進めることで、現場担当者にも主体性や納得感、責任感が自然と生まれた。こうした進め方は、組織規模が比較的コンパクトな弊社のような企業において、特に有効であったと感じている。